

県外産キク苗導入時におけるミカンキイロアザミウマ侵入防止対策について

ミカンキイロアザミウマは幸いにもまだ沖縄に定着していませんが、平成11年と平成14年に侵入しキクに被害を及ぼした経緯があります(図1)。その際には、関係者の努力でその後の発生は収束しましたが、多大な費用と労力がかかりました。そのため、県外から苗を導入する場合には、県内ではまだ発生していない病害虫の侵入に十分な注意を払う必要があります。

2009年12月に沖縄県花卉園芸農業協同組合が福岡県よりキク苗を導入した際に沖縄県の指導の基に行ったミカンキイロアザミウマ侵入防止対策について報告します。県外からキク苗を導入する予定がある場合は、事前に病害虫防除技術センターに相談してください。

1. 侵入防止対策の流れ

ミカンキイロアザミウマの侵入を防止するためには、導入苗に本種が寄生していることを前提に対策を講じなければならない。以下にその流れを示す。

①隔離施設の確保→②苗の導入→③導入時の被害確認→④薬剤散布→⑤経過観察→⑥経過観察後の被害確認→⑦隔離解除

2. 今回行ったミカンキイロアザミウマ(以下ミカンキイロ)侵入防止対策

①隔離施設の確保

2009年12月8日に、沖縄県花卉園芸農業協同組合企画開発部農場の隔離施設内にネットで覆われたトンネルを設置した(図2)。

②苗の導入

2009年12月8日に、キク苗を隔離施設に導入した。

③導入時の被害確認

2009年12月8日に、北部農林水産振興センター農業改良普及課と病害虫防除技術センターで、キク苗を全葉見取り調査にて被害の有無、およびアザミウマ類寄生の有無を確認した(図3)。

④薬剤散布

2009年12月8日に、スピノサド水和剤を散布した。

⑤経過観察

苗の導入時に被害が見られなくても、卵もしくはふ化直後の幼虫が寄生している可能性がある。そのため苗の導入後は一定期間隔離したまま経過を観察した。この経過観察のための隔離期間は、ミカンキイロが1世代に要する日数であり、今回の隔離期間は3週間と設定した。

⑥経過観察後の被害確認

調査は、北部農林水産振興センター農業改良普及課と病害虫防除技術センターで、被害の有無、アザミウマ類寄生の有無、黄色ITシートへのアザミウマ類捕獲の有無を確認をした(図4)。確認されたアザミウマ類は農業研究センターに同定依頼した。2009年12月18日および12月25日に被害確認調査を行ったところ、ミカンキイロは確認されなかった。

⑦隔離解除

2010年1月4日の被害確認調査でも、ミカンキイロは確認されなかったため、隔離を解除した。



図 1. アザミウマとキク被害花

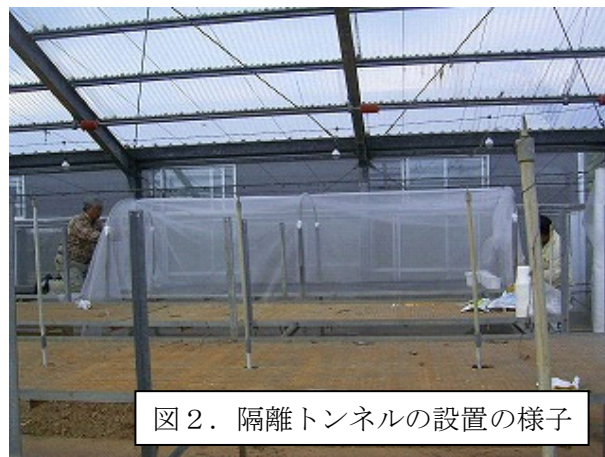


図 2. 隔離トンネルの設置の様子



図 3. 導入時の被害確認の様子



図 4. 経過観察時の被害確認の様子

ミカンキイロアザミウマについて

- ・ 原産地はアメリカ合衆国西部で 1980 年代以降、急激かつ世界的に発生地域が拡大し、野菜・花き類の重要害虫となっている。
- ・ 被害は、野菜では果実のかすり症状や白ぶくれ症状となり、花きでは、新芽の萎縮や褐変、花弁のかすり症状や褐変症状となり商品価値がなくなる。吸汁と産卵痕による被害のほかにも、トマト黄化えそウイルス（TSWV、沖縄県内未発生）を媒介する。
- ・ 被害作物は少なくとも 50 科 200 種以上。キク、バラ、カーネーション、トルコギキョウ、ガーベラ、シクラメン、イチゴ、トマト、キュウリ、ナス、レタス、メロン、かぼちゃ、カンキツ類など。
- ・ 日本では、1990 年に千葉県と埼玉県で初確認され、その後全国的に発生が拡大した。
- ・ 卵は花弁や葉などの組織内に 1 個ずつ産みこまれる。
- ・ 幼虫は主として花弁や頂葉の間に寄生する。老熟幼虫は蛹化のため土壌中や落葉中へ移動する。
- ・ 雌成虫が花粉を十分に摂食した場合の産卵数は、摂食しなかった場合に比べて 30 倍近く増加するため、花があると急激に増殖する。